

## Seeing Is Believing. ～五感で感じよう「おもいやり」の国 インドネシア～

		百瀬 美奈子 山形県立鶴岡北高等学校 英語科	
教科	英語Ⅱ（6時間×2クラス）、 LHR 1時間	対象	2年生 199名

## Ⅰ 実践の目的

常日頃、生徒たちを見ていると、今の生活に満足し、保守的で内向き思考の生徒が多くなっているような気がしていた。自分の住む地域から出たがらない、ましてや海外に行こう、他の国の人と交流しよう、と考えている生徒はほとんどいない。それは他国の状況を身近なこととして考えられないということでもあるといえる。言語を扱う教員として、英語を教える以外に、その背景にある人々の暮らしや文化、習慣、思想など、なんとかして一人一人に興味を持たせたい、広い視野で世界を見てもらいたい、と強く思うようになっていた。限りある高校生活の中の、限りある授業の中、学校生活の中でそれができるならばと。異文化を理解したい、体験したい、と生徒たちが思い、自分自身が、生徒の世界への興味・関心を喚起する授業を実践するために、まずは私自身が行動すること。国際理解への第一歩はまず自分の目で見て現状を知ること。ただ、それがすぐにできない目の前にいる生徒たちに、身近にいる私自身が見て聞いてきた体験談を自分の言葉で伝えなければいけないと考えた。そしてそこから「世界」を「想像」し、「世界」を「見つけ」始め、彼らにとってこれからの自分の生き方を考えるきっかけになることを願った。研修後の授業では、とにかく私が「五感」で感じてきたインドネシア、アチェのすべてを伝える工夫をした。具体的には、人々の生活、食事や文化、そこで生きる人々、また、彼らの心の拠り所ともなっているイスラム教についてなどを生徒に「知らせて考えさせる」実践を行った。そしてそこから自分は1人の地球人として、人のため、世界のために何ができるか、広い視野を持って物事を見つめる、行動を起こす心を育てたいと思った。

## Ⅱ 授業の構成

## 渡航前

- ①インドネシアはどんな国かを知ろう。  
インドネシアの子供たちに質問しよう。
- ②メッセージカード作りと折り紙を折って、「私のお気に入りの漢字」をプレゼントしよう。

## 渡航後

- ①パワーポイントと録画ビデオを用いて、インドネシア、アチェの生活や現地の人々の声を聞こう。
- ②フォトランゲージを用いてインドネシアの衣食住を知ろう。
- ③モノランゲージや音声を用いてイスラム教について学ぼう。

④インドネシア以外の開発途上国に目を向けてみよう。

### Ⅲ 授業の詳細

#### ～渡航前～

##### ①インドネシアはどんな国かを知ろう。

“Selamat Pagi! Indonesia!” というアンケートを作り、生徒たちがイメージするインドネシアについて自由に答えさせた。

◎インドネシアの位置は？（地図に色を塗らせた）



◎インドネシアといえば？

海、南国、エビの養殖が盛ん、マングローブ、暑い、蚊が強い、島国、地震、ヤシの実、石油、赤道に近い、スマトラ沖地震、観光地、イスラム教、開発途上国

◎国旗はどれ？



◎首都はどこ？ → ジャカルタ

◎人口は？ → 約1億2千万人 ・ 約2億4千万人 ・ 約3億7千万人

◎島の数？ → 7,000 ・ 18,000 ・ 30,000

◎宗教は？ → イスラム教

◎言葉は？ → インドネシア語

◎お金の単位は？ → Rp (ルピア) 1円=約115Rp

◎スマトラ沖地震について知ってますか？ → 知っている8名 知らない12名 (/80名)

この地震は（ ）と言い、200（ ）年（ ）月（ ）日午前7時58分、マグニチュード（ ）、スマトラ島沖のインド洋で発生した地震である。その後発生した津波は、インド洋沿岸だけでなく、遠くアフリカ大陸のソマリアまで到達し、死者は22万人を超えた。規模としては東日本大震災の約10倍といわれている。

◎インドネシアについてどんなことが知りたいですか？人々にどんなことを聞きたいですか？

インドネシアの流行、有名なもの、食べ物、人気のあるスポーツ、普段の生活、日本の印象、

有名な観光地、町並み、気候、芸能人、よく見る魚、ジャカルタ48の活躍、携帯の普及、暑さ対策、復興の状況、学校の様子、ペット事情、誇る物、生徒の放課後の過ごし方、生徒の将来の夢、子どもたちの遊び、言葉について、病気や医療について……

私が予想していた以上に生徒たちが、インドネシアに興味、関心を持って答えてくれたことに驚いたが、この質問を念頭に私は研修に参加し、帰国後返答できるように見聞を広げてこようと思った。

②メッセージカード作りと、折り紙を折って、「私のお気に入りの漢字」をプレゼントしよう。 ❦

海を越えた国にいる子供たちへメッセージを伝えよう、ということで、生徒たちに、インドネシアの子供たちへのプレゼントとして、「メッセージカード作り」と「折り紙製作」を行ってもらった。

せっかくだから、日本の文字を伝えようということで、「自分のお気に入りの漢字」を1つ書いて、その意味を英語・日本語で表し、メッセージを添える、という形にした。

【製作の様子】



【こんなカードに仕上がりました！】



【こんなふうにアチエの生徒たちに届けてきました！】



帰国後に、「アチェの生徒には日本語を勉強している生徒がたくさんいたので、みんなのひらがなを頑張っ読もうとする姿に感動したんだ」、という話をしたら、「すごいなあ」という声。現地で撮影してきたビデオの中で、「たくさん日本語を勉強して、日本の大学で学びたい」という夢をはっきりと英語で語るアチェの子供たちの目に、生徒たちはくぎ付けになっていた。

## ～渡航後～

### ①パワーポイントと録画ビデオを用いて、インドネシア、アチェの生活事情や現地の人々の声を聞こう。 ※※※※

帰国後すぐに行ったことは、2年次199名と、教員を対象とした報告会だった。とにかく得てきた情報をすべて伝えたいと思った。タイトルは、“What made me go to Indonesia?” とし、「自分がなぜこの研修に参加したいと思ったのか」、から始めた。ちょうど2年生ということもあり、将来の進路、自分の生き方をじっくり考えなければいけない時期だったので、少しでも視野を広く持って進路選択を行ってくれれば、という思いがあった。これまで以上に異文化への興味・関心を高めるとともに、国際協力・国際支援とは何かに触れ、これから生きる自分たちにできることは何か、を考えるきっかけにしてもらいたいと思った。また、11月にちょうど台湾への修学旅行も経験して異文化交流をめいっぱい体験してきた生徒たちだったので、興味津々といった積極的な姿勢でもう1つの国の海外事情に耳を傾けてくれた。パワーポイントで準備した写真はなんと200枚！欲張りすぎて最後まで行き着かなかった……。

### 【～パワーポイントより1部抜粋～】

それではいよいよこれから8日間を過ごす

#### Aceh 州の

#### Banda Aceh へ。

日本 → ジャカルタ 約6時間  
ジャカルタ → バンダアチェ 約4時間  
(メダン経由で30分停泊したのだが、満席だったので、アチェに向かう後半は空席がほとんど。よほどの用がなければアチェには行かないようである。)

時差は1時間。日本より1時間遅れでした。

では、私が訪問した

#### バンダ アチェ とは……

- ①赤道に近い！ということで暑い、しかし、ジャカルタと違いカラッとしていて湿度が少ない。(ジャカルタものすごい湿度)
- ②アチェ州の人口が500万人の中、アチェの人口は35万人。9割がムスリム。
- ③言語はアチェ語。インドネシア語との違いにびっくり。アチェの中だけでも15の言語があり、「共通言語が必要」と言われ、英語を話すことが普通になってきているということである。



#### 12月26日には、 津波9周年追悼式典に参列

7:00～ 墓地でお祈り  
(3名のイスラム指導者の方のコーランを約1時間読みながら)

9:00～ 移動して式典へ参列  
ここではアチェ州の州知事の方や、イスラムの指導者の方の経典からの教えが掛けられた。  
「この津波は神のもと起こったこと。まず事実を受け止め、今の自分たちの状態を考えない。」  
「いつ起きるかわからない自然災害に備えて常に警戒を、環境や自然災害への意識を高めよう。」  
(その中で聞いたのは、追悼式典のお話の中で、「自然災害は避けられないもの。しかし、災害の問題は人間のお力で防げる」ともよく語られていたことである。アチェでは今大変な問題になっているという。)



### 地震についてわかったこと

東日本大震災が起こった時、アチェでは小・中・高・大すべてにおいて、学校ですぐにお祈りが捧げられたということがわかった。どうしてだろう？ と思ったら、

実は、9年前にアチェで地震が起きた後、日本はすぐに次のような支援を行ったようだ。

- ・避難ビルの建設
- ・学校や孤児院の建設
- ・たくさんのお土産

日本の支援に感謝の気持ちを持っている人にたくさん出会い、何だか日本人として誇りを持つことができた。



### 【私も現地で購入した衣装を身に着けての報告会・・・好評！】



途中で晃月スクールの生徒たちの「おもいやりのうた」を流したり、英語や日本語で夢を語る生徒たちの映像を流したりし、生徒たちは、同世代の子供たちの様子に親近感を持って見入っていた。



最後には、JICA スタッフの方々より研修最後の日に撮らせていただいた、「今を生きる高校生へ」というビデオメッセージを流し、協力隊に志願したきっかけや生き方について貴重なアドバイスをいただき、生徒に伝えることができた。

### 【生徒の感想より1部紹介】

- ・私たちが募金したお金がこうやってエスケープビルディングや学校建設に役立っていたことを改めて形として見ることでよかった。
- ・日本人がたくさん援助していることが印象的だった。
- ・私があげたカードを受け取って喜んでくれている姿を見て、行ってみたい、会ってみたい、実際にお話してみたいなあとと思った。
- ・ありがとう、どういたしまして、のインドネシア語がとてもあたたかかった。
- ・日本語を勉強している子供たちが多く、日本のうたも歌っていてうれしかった。

- ・貧しいように見えるのだが、笑顔がものすごく素敵でみんな幸せそうで前向き。
- ・私も海外に行きたいと思った。見たことのない、初めてのものを自分の目で見たい。英語力をもっとつけなければと思った。
- ・日本でもインドネシアでも忘れられない大地震があって、お互いの国が一番大変でつらいときに助け合っていたことを知った。
- ・自信に満ちた目で将来の夢を語る子供たちがすばらしいし、なんだかうらやましく感じた。
- ・子供たちの目がとてもキラキラしていた。
- ・ごみの問題をなんとかしてあげたいと思った。
- ・津波を「内戦を終わらせてくれた、神様からの贈り物」ととらえたところがすごいなあと考えた。
- ・文化は大きく違うけれど、インドネシアでは神様を大切にされていて、1日5回礼拝を欠かさないことに驚いた。
- ・「日本だけ」ではなく、「世界」を視野に入れて行動したい。英語がんばるぞ。
- ・日本とは全く違う服装や食べ物が印象に残ったが、笑顔を見たら、何か似ているものを感じた。
- ・コーランの「裕福な人は貧しい人を援助する」などの教えがいいなと思い、もっと知りたくなった。
- ・1日5回のお祈りを欠かさず毎日行うということが考えられない。すごいことだと思った。

## ② フォトランゲージを用いてインドネシアの衣食住を知ろう。

インドネシア、アチェの衣食住に関する写真を5～6人のグループに配布し、写真について気づいたことを話し合わせ、用紙に書かせて前で発表してもらった。

～使用したフォトは～

### 1. 12月26日の追悼式でのお墓の前で祈る様子

気づき…みんな白い服装、お墓のような石に赤い花をまいている、泣いている人がいる

### 2. 鯉節を作る女性たちの様子

気づき…魚をカッターで削っている、家か職場かわからない、女性たちのみの仕事、ブルーシートは世界共通か、干物の重さを量っている、売り物か、ジャージで作業

### 3. エスケープビルディングから見た街並みの様子

気づき…平屋が多い、屋根の色が違う、海が近い、ヤシの木がある、家と家の間隔が狭い、道路がなさそう、所々に旗が立っている

### 4. トイレの様子

気づき…便器の脇に浴槽がある、便器とお風呂が隣り合わせ、電気がない、トイレトーパーがない、しきりがいい、ぬくもりがない、手桶がある

### 5. バナナの葉の上に盛り付けてあるナシゴレンなどの食卓の様子

気づき…タイ米チャーハンのような、手づかみでなくスプーンがある、葉っぱの上ののっている、手羽先がある

### 6. 道路を走る車やバイクに乗ったアチェの人々の様子

気づき…バイクにサンダルで乗っている人が多い、バイクで布団を運んでいる、3人乗りして

いる、頭に布を巻いてバイクを運転、バイクのナンバーが長い

### 7. 地熱発電がおこなわれている様子

気づき…山のふもとに足湯のようなプールがある、湯気が出ている、観光地か、山のそばにコンクリートがあり不自然



【グループで話し合った後、各代表が前に出て、それぞれの気づきを発表した】



### ③モノランゲージや音声を用いてイスラム教について学ぼう。

ボイスレコーダーに録音してきた毎朝4時過ぎから流れていたコーランをまず聴かせた。

不思議な驚きがあったようだが、私と同じく、いつの間にか心地よい音、抑揚にじっくり耳をすます生徒が多かった。1日5回のお祈りの意味やさまざまなお祈りの仕方、また12月26日の津波追悼式典の様子を写真を用いて説明し、アチェの人々にとってイスラム教がどれだけ生活の基盤になっているかを伝えることができた。

そのあと、イスラム教に関するフォトランゲージを行い、グループごと前で発表させ、ジルバブなどを用いてモノランゲージを行った。なぜ女性はいつもジルバブを身に着けているのかを話し、イスラム教の中では女性の存在がどんなに大切な存在であるかを私の知る範囲で伝えることができた。



- ・1日に必ず200センテンスを読む。
- ・1カ月で1冊読むペース。
- ・1冊30JUZ(30課)。
- つまり、1JUZ200センテンス。

このコーランの音声により、  
私は毎日朝4時半に起こされました。  
毎朝約1時間、有線放送のような感じで  
流れていたんですよ。



この墓地は約2万haあり、身元不明者の方々の  
共同墓地アチェには3つの墓地があります。

〈SIRON墓地モニュメントの言葉〉

辛いことがあっても我慢します  
嬉しいことがあったら神に感謝します  
そうすれば、幸せが訪れるでしょう

～使用したフォトは～

1. シロン墓地の写真
2. 津波のあとのがれきの中に残ったモスクの写真
3. イスラームの礼拝の様子
4. 「SUZUYA」やホテルのフロントスタッフでのジルバブを身に着けた女性たちの写真

【モノランゲージのあとに実際ジルバブを身に着けた生徒】





## ④インドネシア以外の開発途上国に目を向けてみよう。

イスラム教に興味を持って調べ始めたら、以前から気になっていたパキスタンのマララ・ユスフザイさんの国連での演説を思い出した。同じイスラム教の国でも、教育に対する考え方が異なることを伝えたいと思い、1時間の授業を行った。



【マララさんの写真を見せて】

1. この人は誰でしょう。 2. 次の英語の演説を目を閉じて聴いてみましょう。
3. 英文スクリプトに英単語を入れながらもう1度聴いてみましょう。

(スクリプトの1部抜粋)

*Dear brothers and sisters, do remember one thing. Malala day is not my day. Today is the day of every woman, every boy and every girl who have raised their voice for their rights. There are hundreds of Human rights activists and social workers who are not only speaking for human rights, but who are struggling to achieve their goals of education, peace and equality. Thousands of people have been killed by the terrorists and millions have been injured. I am just one of them.*

*So here I stand.... one girl among many.*

*I speak — not for myself, but for all girls and boys.*

*I raise up my voice — not so that I can shout, but so that those without a voice can be heard. Those who have fought for their rights:*

*Their right to live in peace.*

*Their right to be treated with dignity.*

*Their right to equality of opportunity.*

*Their right to be educated.*

*Dear Friends, on the 9th of October 2012, the Taliban shot me on the left side of my forehead. They shot my friends too. They thought that the bullets would silence us. But they failed. And then, out of that silence came, thousands of voices.*

*The terrorists thought that they would change our aims and stop our ambitions but nothing changed in my life except this: Weakness, fear and hopelessness died. Strength, power and courage was born.*

*I am the same Malala. My ambitions are the same. My hopes are the same. My dreams are the same.*

*Dear sisters and brothers, I am not against anyone. Neither am I here to speak in terms of personal revenge against the Taliban or any other terrorists group. I am here to speak up for the right of education of every child. I want education for the sons and the daughters of all the extremists especially the Taliban.*

*I do not even hate the Talib who shot me. Even if there is a gun in my hand and he stands in front of me. I would not shoot him.*

#### 4. この人は何を訴えているのでしょうか。 5. なぜ注目されたのでしょうか。

→グループごとに自由に話し合わせて発表させた。

(生徒の発表より1部紹介)

- ・なぜ女子だけが教育を受けてはいけないのかが疑問だった。「勉強したい」と言っただけで銃で撃たれる社会。日本では考えられないこと。イスラム教を信仰しているというだけでも国によって違いがあり、私たちと同じ10代の子供たちがこんなに苦しんでいる現実を知って驚いた。また、権利というものは、当たり前には与えられるものではなく、勝ち取るものでもあるのだと思った。

#### 6. あなたは女性としてこれからどんな生き方を理想としますか。

(生徒の発表より1部紹介)

- ・同じイスラム教のアチェの子供たちは、勉強することを楽しんでいるように見えた。そして日本に行って医学の勉強をしたい、建築の勉強をしたい、と自由に発言していた。私は世界中の国々の女性たちがもっと自分の考えを発信していくことで、女性の地位が向上して、お互い自由を享受しあえるのではないかと思うので、周りに耳を傾けながらも、マララさんのように、自分の意見を、思いを大事にして発信できる人間になりたいと思った。
- \*振り返りとしては、授業で宗教を扱うことは難しいのではとも思っていたのだが、本校が女子高であるがゆえに、女性としての生き方を考える良いきっかけになったと思う。授業の最後には、再度、協力隊に参加されたJICAの女性スタッフの方の映像や、アチェの晃月スクールの女子生徒たちの、夢を語る映像をながし、とにかく教育が、勉強することが、自分の生きるうえでの最大の武器になることを確認し、今自分の置かれている社会に感謝しながら努力し続けようとお互いに確認することができた。

## IV 実践の成果

今回の実践を終えてからというもの、英語の教材やニュースの中でインドネシアの話題が出てくると、身近な国として生徒が親近感を持って積極的に知ろう、考えようとするようになったことに、手ごたえを感じた。生徒たちは、修学旅行で初めて海外に出て、台湾の人々、文化に触れ、その2か月後に私の実践報告を聞き、授業でさまざまな活動を行ったことで、日本だけではなく、もっと広い視野で物事を見つめよう、世界状況を理解しよう、そして、自分が海外に行って何か協力をしたい、と思うきっかけになったことは最大の成果であったと思う。また、生徒の中には、日本は本当に恵まれている、と改めて実感した生徒もいた。外国の事情を知ったうえで、自分の国の生活を客観的に見直すことができたことも収穫であったと思う。

## V 課題

今回私がこの研修に参加したいと思ったきっかけの1つに、最近の生徒たちの保守的思考、視野を広げようとしないう姿勢を挙げていた。ここにいれば何も不自由ない、物質的には豊かな生活を送ることができるという考え方を持つ生徒。しかし、今回の研修の報告・実践を行ったことで、目に見えて生徒の変化が伺えた。異文化理解に興味を持ち、自分の目で世界を見たい、何か人の役に立てることをしたい、と考える生徒が出てきた。だからこそ私は、今後もっともっと工夫を凝らしてこの研修で得たことを生徒に伝えていかなければいけないと同時に、英語科教員として、日本と世界とをつなぐパイプ役を担い、私自身が努力を続けていくことで、1人でも多くの子どもたちがこれからの世界のために役に立てる人間になってくれることを期待したいと思う。また、私が今回の研修で一番感じたことは、帰国してアチェを思い出そうとすると、まず「人」が浮かぶということである。国と国とのつながりは、結局は、人と人とのつながりから生まれることを改めて実感した。最後に残るものは、「人の心」、出会った「人」との思い、人とのつながりなんだと思う。私は今後も教員として、自分も常に成長していきたいと思うと同時に、「人」を育てていきたいと思う。

## ●出典・参考図書

・『わたしはマララ』 マララ・ユスフザイ 著 (学研)